

## 報 告 2

# 聖地バナハオ巡礼をめぐって

寺 田 勇 文\*

(鹿児島大学南方海域研究センター)

---

はじめに

- 1 聖地バナハオ
  - 2 聖地の「移転」
  - 3 巡礼路
  - 4 祈りとしての巡礼
- 

はじめに

巡礼(者)を意味する pilgrim ということばの語源は、ラテン語のペリグリヌス peregrinus で、もともとは「異邦人」とか「放浪者」の意味であったといわれます。このことは、巡礼という行為が、日々の暮らしあるいは日常の世界という枠組ではなく、そこから一時的にせよ離れて行なわれるものであったことを示しています。日常の世界を離れて聖地へと向かうというプロセスが、巡礼にはつきものであることを教えてくれます。そして、巡礼は「悔い改めの重要な形」であり、そうした巡礼の過程での「歩みが辛いだけにいっそう報いられるべき祈り」の形態の一つであったのです。

世界には、あちこちに巡礼地、あるいは聖地と呼ばれる場所があり、実に多くの人々がこれらの聖地をめざして巡礼を行なっています。キリスト教文化圏のヨーロッパに限っても、たとえばスペインのコンポステラ巡礼(サンチャゴ巡礼)は古くからよく知られています。キリスト教の場合、巡礼はカトリックに限られていますが、コンポステラはローマやエルサレムとならぶ三大巡礼地の一つでした。9世紀に使徒大ヤコブの墓所が発見されて以降、10世紀から18世紀頃まで何百万人というキリスト教徒が、ヨーロッパ各地からピレネー山脈を越えてスペインのコンポステラをめざしました。コンポステラ巡礼にたつ者は、「財産を整理し、懺悔し、路銀を見出し、衣服を調べ、頭陀袋と巡礼杖を祝福して」もらい、徒歩で歩く貧しい旅人の姿となって、道をいそいだと描写されています。

この報告では、フィリピンにおける聖地巡礼について考えてみたいと思います。具体的には、ルソン島のマニラから南にひろがる南タガログ(Southern Tagalog)地方にあるバナハオ山を舞台として行なわれる聖地巡礼について、その概要を報告します。バナハオ山には、古くからの大きなカトリック教会があるとか、あるいは聖母マリアの出現の場所があるとかというような、いわば公式的なカトリシズムあるいは教会に密接につながるような聖地としての構成物はありません。したがって、バナハオ巡礼はカトリック教会が奨励している信心業では

---

\*現在、上智大学アジア文化研究所

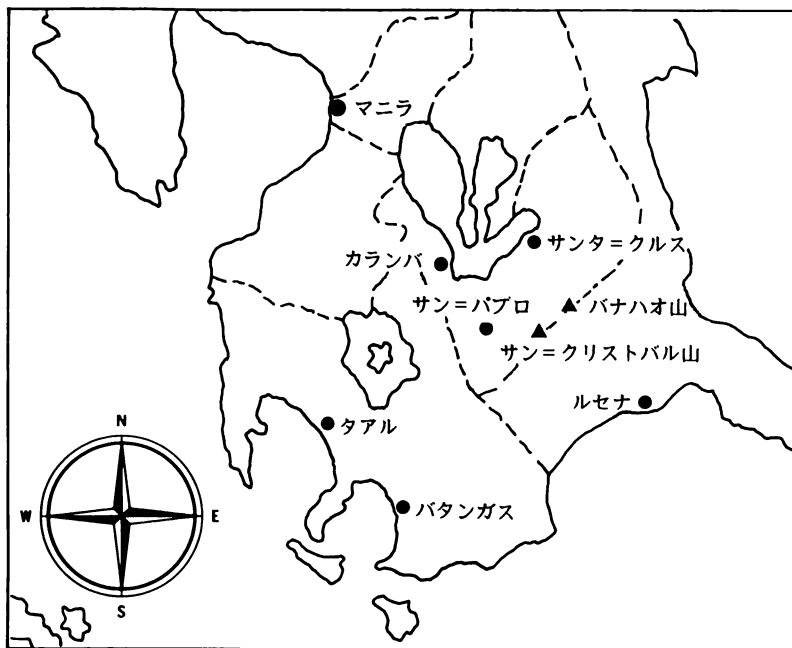
ありません。むしろ、教会からは距離を保ちつつ、より民間信仰に近づいた形で息づいている民衆カトリズム、伝統的な精霊信仰、そして山岳信仰とに支えられた宗教的表現としての聖地巡礼である、と考えられます。毎年、とくに復活祭前の聖週間になると、フィリピン各地から多くの巡礼者を迎え入れて、山中における巡礼が行なわれます。その数は2万人近くに達するともいわれます。

## 1 聖地バナハオ

最初に、バナハオ山 (Mt. Banahaw) について簡単に述べておきます。バナハオ山は、先ほど申したようにルソン島の南タガログ地方に位置しています (資料1)。標高2177メートルで、安山岩からなる成層火山です。ちょうどラグーナ州とケソン州との州境にそびえています。バナハオ山のすぐ西隣にはサン＝クリストバル山 (Mt. San Cristobal) がひかえています。さて、このバナハオ山のケソン州側の南の麓にドロレス (Dolores) 町があります。ドロレスから、さらに山の斜面をのぼったところに、サンタ＝ルシア (Sta. Lucia) というバラングイ (barangay) つまり最小の行政単位である村があり、そこではいくつかの宗教集団が共同生活を営んでいます。このサンタ＝ルシアがバナハオ巡礼のいわば出発点にあたる場所です。サンタ＝ルシアから、さらに奥に入ったキナブハヤン (Kinabuhayan) と呼ばれる地域、そしてバナハオ山頂へとつらなる地域一帯がバナハオ山の聖地 (Santong Lugar) として知られています。キナブハヤンというのはタガログ語で「復活の地」を意味しています。以上がバナハオ巡礼の舞台です。

ところで、なぜバナハオ山が聖地として認識されるようになったのか、それはいつ頃から

[資料1] ルソン島南タガログ地方略図



のことなのか、という問題があります。バナハオ山麓で共同生活を営むいくつかの宗教集団には、聖地あるいはバナハオ山に関する伝承があります。それについては、後ほど詳しくお話するつもりですが、バナハオ山を問題にする際には、19世紀の中頃、すなわち1830年代から40年代の聖ヨセフ兄弟会の活動が重要だと思われます。先ほどの池端先生のご報告のなかに、この聖ヨセフ兄弟会という信徒信心会のことが出てまいりましたが、この信心会の主なる活動の舞台はバナハオ山の東側から北側にかけての麓の町でした。そして、池端先生のご研究では、聖ヨセフ兄弟会の指導者であったアポリナリオ＝デ＝ラ＝クルス（Apolinario de la Cruz）が1834年の時点で、兄弟会の会員に対して山での巡礼行を提案したこと、その山がバナハオ山であったこと、さらに、聖ヨセフ兄弟会による巡礼行が、現在、復活祭前の四旬節に盛んに行なわれているバナハオ巡礼の初期の形態であった可能性があることが示唆されています。また、19世紀の末から今世紀初頭のフィリピン革命期に、コロムと呼ばれる宗教結社がバナハオ山とサン＝クリストバル山の裾野を根拠地として活動し、これらの二つの山に苦行の実践を目的とする巡礼行を行っていたことも明らかにされています。また、1870年代のスペイン人行政官によって書かれた報告書にも、バナハオ山中における巡礼に関する記述が見られます。同じ頃、つまり1870年代末から80年代にかけて、バナハオ山の北の裾野の町マハイハイ、南側のドロレスを訪問したフランス人博物学者マーシュの旅行記にも、これらの地域の住民がバナハオ山を聖なる地として崇めているとの記述が含まれています。19世紀末のバナハオ巡礼については、それに実際に参加した人自らが書き留めた記録が残されています。それには、男も女も苦行の実践のために、わざわざ石を背負って山を登るといった光景が描かれています。こういった聖地としてのバナハオ山に関する記述は他にも見られます。バナハオ山あるいはその一部の山麓が少なくとも19世紀中ごろ以降には、その自然景観も手伝って特別な宗教的活動の舞台となっていたであろうことが推測されるわけです。20世紀に入ってからは、限られた文献資料からもバナハオ山が自然の霊、天の声（Santong Boses）と交わることのできる聖地として、巡礼の対象となっていたことが読みとれます。

## 2 聖地の「移転」

バナハオ地域、とくにドロレスとキナブハヤン一帯には、大小の多くの宗教団体の根拠地がおかれています。そのうちのいくつかは、信者が共同生活を営んでいます。宗教団体の数はおよそ30といわれていますが、正確な統計はありません。これらの宗教団体のなかで比較的良好に知られているのは、サンタ＝ルシアすなわち聖地の入口にあたる村で共同生活を営む「神の神秘なる都の教会」（La Suprema Iglesia de la Ciudad Mística de Dios、以下ミスティカと略す）、キナブハヤンの「三位一体の教会」（Iglesia Tatlong Persona Solo Dios）です。

バナハオ山における巡礼のルートには、いくつかのバリエーションがあります。巡礼を主宰する宗教団体やグループによって、聖地として考えられる中心地点が異なるという問題もあります。かなりの地点が共通の聖地としてとらえられているわけですが、あるグループにとっての独自の聖地というものもあります。また、集団ではなくて個人あるいは数人で行なわれる巡礼もあります。ですから、聖地バナハオにおける巡礼といっても、実際にはこうしたバリエーションがあることを前提として考えなくてはならない。そこで、今日の私の報告では、先ほどのミスティカすなわち「神の神秘なる都の教会」の信者たちが集団で行なう巡礼を、主な対象として検討していくことにします。

ミスティカという教会について詳しく述べるだけの時間がありませんので、いくつかの点だけをかいつまんでお話しします。まず、この教会の正式名称に見られるように、ミスティカは通常のローマ＝カトリック教会、あるいはプロテスタント系の教会ではないという点があげられます。それではキリスト教の教会ではないのかと問われると、それは何をもってキリスト教会とするかという定義の問題ともかかわってきますが、ミスティカはキリスト教系の教会、あるいは土着的な宗教とキリスト教との接点に位置づけられる教会ではあっても、通常の意味でのキリスト教会ではない、といえるでしょう。ミスティカにおいては女性祭司制が取り入れられており、サンタ＝ルシアで共同生活を営む信者総数は、1985年現在で105世帯およそ630名です。これはサンタ＝ルシア村全体の人口の3分の1に相当します。

聞き書きにもとづいた資料によると、ミスティカの創立は19世紀末のこととされています。創始者はマリア＝ベルナルダ＝バリタアン (Maria Bernarda Balitaan、MBBと略される) と呼ばれる女性です。1876年にルソン島バタンガス州に生まれ、1925年あるいは27年に他界していますが、ミスティカの神学では「母なる神」(God the Mother) として位置づけられています。これはカトリック教会のマリア崇敬における「神の母」という考え方とは異なっています。この「母なる神」という観念は、次のように説明されます。すなわち、父なる神は天と地とを創造したが、その過程で孤独感を抱き、母なる神を創造した。神はイエズス＝キリストを救い主としてこの世に遣わしたが、人間はキリストを拒絶したため、キリストは死に、そして復活した。キリストの復活の後に、父なる神はこの世に母なる神を与え給われた。その母なる神が、ミスティカの創始者であるマリア＝ベルナルダ＝バリタアンであると信じられています。

このようなミスティカの神学、あるいは信仰体系を整理して論じるためには手元の資料が不足していますが、巡礼との関係で一点だけ指摘しておきます。それは、なぜミスティカはバナハオ山に教会本部をおき、バナハオ山を聖地として重要視するのかという問題に関わっています。ミスティカには「聖地の神秘的な移転」(Mystical Transfer of the Holy Land) にかかわる信仰があり、ミスティカの信仰体系の根幹を形作っています。この聖地の「移転」の内容は、おおよそ次の通りです。キリストの処刑後に、全能の神 (Dios na Makapangyarihan sa Lahat) は、世界がひきつづき混沌状態にあることを悲しんだ。中東は依然として荒廃したままであったので、神は聖地の移転を決意された。その最適の移転先としてバナハオ山を選んだ、というものです。聖地の「移転」に関しては、次の様な異説もあります。それは、キリスト処刑の時に大地震が地を揺るがし、カルワリの丘が二分された。そこで五人の大天使が、カルワリの丘の半分をバナハオ山に運んだ。それ故にバナハオ山中には「キリストの足跡」など、キリストにまつわる記念物が見いだされる、と説明するものです。

聖地の「移転」についてどちらの説をとるにしても、世界の終末における善と悪との決戦場としてのハルマゲドンが、1995年すなわち第二の千年王国の5年前に到来するという点では一致しています。ハルマゲドンの到来時には、自然災害、戦争、飢餓、疫病の蔓延といったこの世の終末的な状況が展開される。しかし、バナハオ山は雲に包み込まれ核汚染からも守られて生き残る。こうした終末的な出来事は、キリストの再来を促すものであり、キリストはバナハオ山に天から降りてくると信じられているのです。こうした危機が去った後は、バナハオ山に与えられていた聖地としての役割は、本来の中東に返還されることになるが、バナハオ山の底部あるいは下方から神の神秘なる都が出現して、千年王国の時代を迎える。

千年王国の時代には、黄金の都、黄金の宮殿、黄金の教会、黄金の旗が出現し、14万4千の人びと (doce por doce) が救われ、永遠の命を得る、とされています。聖地の「移転」説の内容は以上の通りですが、このようにミスティカの信仰体系には、キリスト教の、とくに聖書（黙示録）の影響が見いだされます。

もう一つ、ミスティカの信仰体系と儀礼を特徴づける「犠牲」(Sakripisyo) という点が、巡礼を考える上で重要です。ここでいわれる犠牲には、鞭打ち (Pagsusuplina) の儀礼や裸足での聖地巡礼などが含まれます。

### 3 巡礼路

次にバナハオ巡礼の内容を検討します。まず、聖地の概要を明らかにしておきます。資料2は聖地の概略図です。大変見にくい地図なのですが、これは1985年5月にバナハオ山で短期間の調査を行なった際に入手したものです。これを作成したのはそれ以前にバナハオ地域に滞在していたアメリカ人です。距離や縮尺といった点はともかくも、この地図から全体の位置関係を把握することができます。聖地は地理的にはサンタ＝ルシアからバナハオ山頂に広がる一帯で、しかもラグナス川 (Lagnas River) の西側域の斜面に広がっています。サンタ＝ルシア一帯はパラン地区 (Parang-side、草原部の意味) と呼ばれることもあります。それより北の山頂に至る地域一帯がキナブハヤンと呼ばれます。サンタ＝ルシアからキナブハヤンの入口の集落までは、徒歩でおよそ1時間の距離です。このパラン地区は、ミスティカが「新しきエルサレム」(Ang Bagong Herusalem)、または「聖なる約束の地」(Tierra Santa de Promission または Holy Promised Land) と呼んでいる地域でもあります。これらの聖地全域はバナハオ山頂から眺めると、南西側の裾野にかけて広がっているわけです。

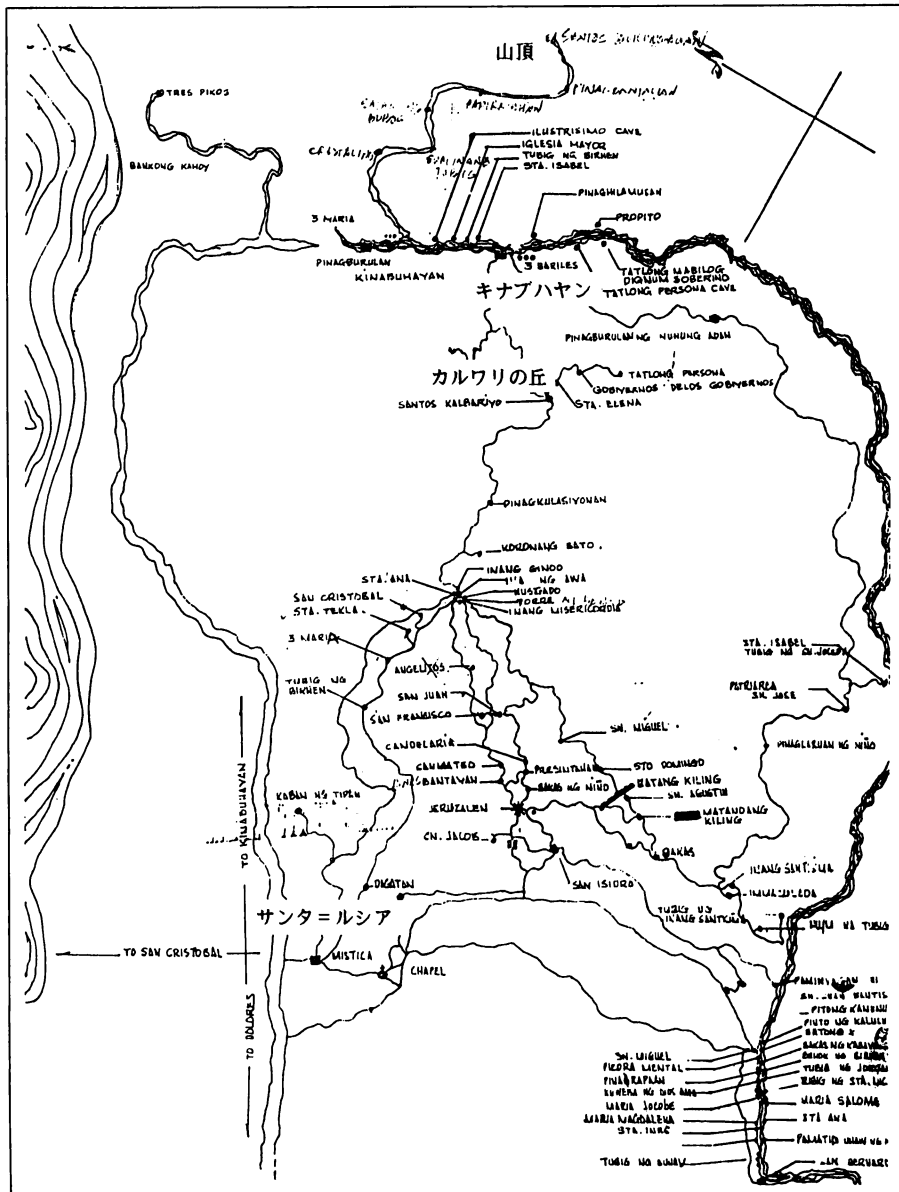
ところでバナハオ山における巡礼は、タガログ語で pamumuwesto といわれ、これはプウェスト (puwesto) を巡るという意味です。バナハオ巡礼は、広大な地域に散らばっている聖所を巡っていくことなのですが、その聖所にあたるものが一般にプウェストと呼ばれています。プウェストというタガログ語の語彙は、通常「場所」や「位置」を意味する語ですが、この聖地バナハオの文脈では「聖所」を意味します。プウェストの多くは自然物でできており、その形態は多種多様です。ある報告によるとパラン地区だけで50以上あるとされていますが、別の報告では100とされています。自然物からなるプウェストの具体的な形態は、フィリピン大学人類学科のコパール教授他による予備的な分類にしたがうと、次の4種類になります。すなわち、岩 (bato)、泉 (bukal)、洞窟 (kuweba)、山頂あるいは峰 (taluktok) です。

次に、ミスティカととくに関係の深いパラン地区のプウェスト群を分類した資料を紹介しておきます。これらのプウェストのなかには、古くから知られているプウェスト (100カ所のうちの約20カ所) もあり、またミスティカ以外の宗教団体によってプウェストとして認識されているもの、さらに近年になって新たにプウェスト群に加えられたもの (100カ所のうちの約80カ所) が含まれています。

各プウェストには、独自の名称が、例えば「聖母の髪」(Buhog ng Birhen) とか「父なる神の洞窟」(Kuweba ng Dios Ama) のようにつけられています。その命名の事情を、天然の泉からなるプウェストである「聖イシドロの井戸」(Balon ni San Isidro) を例にとって紹介します。この「聖イシドロの井戸」は、ミスティカによって守られているプウェストですが、ミスティカの指導者であったアマド＝スアレズ氏が1950年代初期に、Ibon de Custodio という

名の鳥に導かれてこの泉にたどりついたのが起源であるとされます。この導き役となった鳥は変装した神であったと信じられており、神自身がミスティカの指導者にプウェストへの道を示したというわけです。

[資料2] バナハオ山の聖地概略図



こうした例に限らず一般にプウェストは、神によって創造されたものであり、そこには神の力 (kapangyarihan) があますところなく表現されていると理解されます。したがって、多くの巡礼者たちが述べるように、岩は岩であり、泉は泉であって、そうした自然物としての姿を変えることはできないが、神の創造物である岩あるいは泉の前で人が祈るということは、その岩あるいは泉を創造した神の力を認めることを意味するのです。各プウェストには番人 (tagatanod) あるいは守護者である聖なる霊 (banal na espiritu) がいて、巡礼者の安全な通行を見守っていると信じられています。こうした自然霊も力を持つとされます。

ミスティカの信者による集団的な巡礼は、通常は毎月最後の日から翌月1日にわたって、1泊2日の行程で行なわれます。この月末の巡礼には、サンタ＝ルシアで生活する信者の他にも、ふだんはルソン島のバタンガスやカヴィテで暮らしている信者などが、前日までにサンタ＝ルシアの教会本部に集合します。巡礼参加者は50名位になります。こうした集団的な巡礼には、開始から終了まで一定のオーダーがあるわけですが、標準的なあるいは規範的なオーダーは、次の通りです。

1. 教会本部に集合。
2. 指導者の家にある祭壇 (MBB の肖像画) の前で祈る。
3. 教会の主祭壇前で祈る。
4. 教会に隣接する広場にある大きな木の十字架前で祈る。
5. 教会の右隣のカルワリの門 (Pinto ng Kalbaryo) で祈る。
6. 聖地への巡礼開始。
7. 各プウェストにて祈る。
8. 最後のプウェストで感謝の祈りを捧げる。
9. 教会へ帰還。
10. 教会に隣接する広場の十字架前で感謝の祈りを捧げる。
11. 教会の主祭壇前で祈る。
12. 解散。

このような巡礼は、1950年代の終わりからすでに実践されており、1982年にミスティカの指導者であるスアレズ氏が死去した後になってとくに形式化されたものです。全体を通じてもっとも重要視されているのは祈り (panalangin) です。各プウェストに到達した巡礼者は、神に対して祈り (dasal) を捧げます。また、プウェストによっては、その場所で水を浴びたり、地底の洞窟のなかに降りて祈るということもあります。その後、各プウェストの霊に対して感謝の祈りを捧げ、賛美歌 (dalit) を歌います。祈りや儀礼の過程では、時としてトランス状態におちいる信者もみられます。また、こうした祈りのなかには、信者またはその代表者が声を出さずに口のなかで唱える「秘密の祈り」 (lihim na dasal) もあり、これは山のなかでの巡礼行が安全に行なわれるようにとの意図を持って捧げられます。

上の巡礼のオーダーのなかで、7から8にかけてのプウェストは、具体的にはどのようなものでしょうか。その主なものを1985年4月—5月の資料をもとに、検討します (ローマ字表記は、各プウェストの名称)。

#### 1. Sta. Lucia complex

以下のプウェスト群からなり、全体は聖ミカエルによって守られる。

San Miguel (岩)

- Piedra Mental (岩)  
Pinto ng Kaluluwa (川に接した岩壁)  
Tubig ng Jordon (川)  
「ヨルダン川」。水につかる。  
Tubig ng Sta. Lucia (地下水流)  
儀礼的な沐浴をする。  
Buhok ng Birhen (地下水流)  
「聖母の髪」と呼ばれ、儀礼的な沐浴をする。
2. Hilamusan (地下水流)  
(他者の) 顔を洗う。
3. Balon ni San Isidoro (泉)  
「聖イシドロの井戸」と呼ばれ、象徴的洗礼を授けられる場所。この井戸から汲みあげた水を、リーダーが巡礼者の頭部にかける。
4. Balon ni Santong Jacob (泉)  
「聖ヤコブの井戸」と呼ばれ、この水は硫黄分を含み、皮膚病に効くとされる。水が悪臭を放つ時は、死霊が水浴しているとの信心がある。
5. Prisintahan  
「登録所」。以下の二つの洞窟からなる。  
Kuweba ng San Pedro (洞窟)  
「聖ペテロの洞窟」。巡礼者は自分の名前を紙片に書きとめ、それをローソクの火で燃やす。聖ペテロの元帳に登録することを意味する。  
Kuweba ng San Pablo (洞窟)  
「聖パウロの洞窟」。  
この後 Tubig ng Santisima Trinidad (「三位一体の小川」) を巡る。
6. Inang Santisima (洞窟)  
「聖なる母」。洞窟のなかにある木の十字架の前にローソクをたてる。
7. Matandang Kiling (洞窟)  
「古い鐘」と呼ばれる洞窟。
8. Ina ng Awa (洞窟)  
「慈悲深い母」と呼ばれる洞窟。天の声 (Banal na Boses) と交信することができる洞窟として知られ、内部には絶えざる御助けの聖母像がおかれている。
9. Husgado (洞窟)  
「裁判所」。迷路のようになっている洞窟。下の入口から入り、暗い洞窟をぬけて上の出口に至る。罪人はここを通り抜けることができないと信じられている。
10. Inang Ginoo (岩)  
ここから険しい道を上り、カルワリの丘に至る。
11. Santos Kalbaryo (丘の頂上)  
「カルワリの丘」。キリストが処刑された場所。標高500メートル付近にあり、3本の木の十字架がたてられている。ここまでがパラン地区に点在するプウェスト群であり、この後キナブハヤン側を下る。



12. Santos Kolehiyo (岩)

「諸聖人の学校」と呼ばれ、諸聖人の会合の場とされている。

キナブハヤンの聖地もパラナ地区と同じく、岩、洞窟、泉、小川などからなるプウェストの集合体である。

13. Kinabuhayan (川底の足跡)

キナブハヤンのプウェストのなかでもっとも重要なのは、川底の岩にしるされた「キリストの足跡」である。キリストは処刑後3日目に、このキナブハヤンでよみがえったとされる。苦難の生涯と死の後には、新しい生が約束されていることを示す。

14. Kristalino (泉)

水を浴びる。その後、険しい道を登り山頂をめざす。

15. Suplinang Tubig (滝)

30メートル程の大きな滝。流れの下の岩に身体を横たえ、水を浴びる。

16. Bubog na Kristal (泉)

泉。身体を清める。

17. Kuweba ng Dios Ama (洞窟)

「父なる神の洞窟」。洞窟の入口は広く、内部中央には木の十字架がおかれている。ローソクを灯し、祈りと歌を捧げる。サンタールシアを出発した巡礼団はおよそ5時間をかけて、この「父なる神の洞窟」に達する。ここからさらに6時間をかけて、バナハオ山頂上にあるプウェストをめざす。

18. Santong Durungawan (山頂)

「聖なる窓」。頂上から火口を下った地点には「乳の湖」(Dagat ng Gatas)、「血の湖」(Dagat ng Dugo)などのプウェストが点在する。

以上は、いわばミスティカとしての理想的な巡礼ルートであるといえます。毎月末の信者による巡礼は、必ずしも上のようにバナハオ山頂をめざすのではなく、「カルワリの丘」までを一区切りとするのが普通です。その場合には一日行程の巡礼になります。そうした1日あるいは1泊2日の行程で、聖地を巡るのが一般的です。そして信者は2年間をかけて、聖地の全域すなわちパラナ地区とキナブハヤン側のすべてのプウェストを巡ることが望ましいとされています。

#### 4 祈りとしての巡礼

聖地バナハオにおけるミスティカの信者らによる巡礼の内容は、おおよそ以上の通りです。このような巡礼は、バナハオ山の他の宗教集団にも共通する要素を持っています。ここに「三位一体の教会」関係者が用意した、キナブハヤン側の聖地を中心とするバナハオ巡礼のための手引きがありますが、最重要視されるプウェストの違い、巡礼ルートの違いはあるにしても、聖地バナハオに対する巡礼者の態度、巡礼のあり方については、ミスティカと共通するものがみられます。ついでに申しあげておきますと、この巡礼者のための手引きは、最近信者以外で聖週間にバナハオ山を訪れる人々が多くなったこと、国立公園に指定されているバナハオ地域を政府観光局が、登山やハイキング、自然観察の格好の場所であるとともに、宗教的な山として宣伝していることもあって、準備されたものだと思います。

さて、それでは、このようなプウェストを巡る聖地巡礼は、信者にとってどのような意味

を持っているのか。信者は巡礼を通じて、何を祈り、何を求めることができるのであろうか、という問題があります。巡礼に参加することによって、あるいは特定のプウェストで祈ったり沐浴をすることにより病が癒され、ある種の奇跡を体験したというような事例は、体験者達から数多く聞かされます。しかし、初めに述べたように、巡礼は信仰行為であり、祈りの形態の一つです。そして、個々の巡礼者の悩み、葛藤、祈り、苦しみは様々であるとしても、聖地に点在する一連のプウェストを巡る巡礼という行為には、一定の枠組あるいは構造的なテーマが存在すると考えることができます。そのなかでは、自己犠牲とそれをもとにした神あるいは超自然的な存在との一体化をはかる、という点がとくに重要であると思われます。裸足の巡礼というような肉体的な苦行を信者自らが実践する、さらに精神的な面での苦行を体験する、自己を捨てて神に絶対的に依存し、ゆるぎない信仰を確立する、あるいはそうした信仰を試される場としての巡礼。そして、そのような試練に耐え抜こうとすること自体が、神に対する信仰の証として追求される。聖地バナハオのコンテクストで捉えれば、キリストの受難の生涯を思い起こし、その苦しみの幾分かでも追体験しようとする信者たちによる苦行の実践であるということです。

このようなキリストの苦難の追体験、あるいはキリストの苦難に自己を近似させるという宗教的行為は、カトリック儀礼の枠組に照らして考えれば、四旬節の行事の一つである十字架の道行 (Stations of the Cross) に見られるものと共通しているかも知れません。十字架の道行とは、死刑の宣告に始まり十字架をかついで歩み、刑場で処刑された後、墓に葬られるまでのキリストの苦難を14の聖画あるいは留をたてて記念し、カトリック信者がその一つ一つを祈りとともに巡っていくものです。バナハオ山中の聖地における巡礼も、スペイン植民地下のフィリピンに導入され、現在でも盛んに行なわれているこの十字架の道行に形態上の原型をとったものであるかも知れませんが、バナハオ巡礼においては、十字架の道行にみられるようなキリストの受難に関わる14の出来事、そこから派生する「14」に関わる象徴性は、手元の資料ではみられません。

歴史学者のイレート氏は、バナハオ巡礼は、「山を登り、せまい洞窟をくぐりぬけ太陽熱のなかで祈ること」であり、それを通じて耐えることを体験し、カルワリの出来事を追体験し、キリストの苦難に対し自らをダマイ (damay、同情、同化、自己一致) させようとする試み＝信仰行為であると指摘しています。バナハオ巡礼において求められるのは、「犠牲行為を通じて、精神においてキリストのようになること」であり、そのための儀礼過程がバナハオ巡礼である、と考えられます。そして、現代のバナハオ山における巡礼は、「聖地の神秘的移転」に根ざした聖地としてのバナハオ山の自然環境、そこを本拠地とする土着的な宗教集団にみられる教えに支えられて、はじめて成立するものです。この聖地バナハオ巡礼に象徴されるように、フィリピンの民衆宗教レベルでは、祈りの一つの形として巡礼があることは明らかです。

#### 参考文献

- ピエーレ＝バレ、ジャン＝ノエル＝ギャルガン (五十嵐ミドリ訳). 1986. 『巡礼の道 星の道—コンポステラへ旅する人びと』平凡社.
- 聖心女子大学キリスト教文化研究所編. 1987. 『巡礼と文明』春秋社.
- 池端雪浦. 1985. 「19世紀フィリピンの民衆カトリシズム—聖ヨセフ兄弟会の活動を中心に

して』『アジア・アフリカ言語文化研究』30.

Ileto, Reynaldo C. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*.

Quezon City: Ateneo de Manila University.

Tatlong Persona Solo Dios. n.d. *Paglalakbay sa Banahaw*. 18p.

Somare, Rene D. 1986. "Pamumuwesto of Mount Banahaw" *Philippine Studies* 34.

Covar, Prospero R. 1986. "Prayer in Mt. Banahaw Context" *Ministry Today* 2(1).

## 付 記

発表当日のスライド写真の一部に、フィリピン大学人類学科の Dr. Prospero R. Covar およびアテネオ＝デ＝マニラ大学英文科の Prof. Guillermo Pesigan 両氏撮影のものを利用させていただきました。また、1985年5月のバナハオ地域での調査は、三菱財団助成研究プロジェクト「フィリピン・フォーク・カトリシズムの歴史人類学的研究」（代表者：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、池端雪浦氏）の一環として行なわれました。ここに記して感謝します。

[写真1]



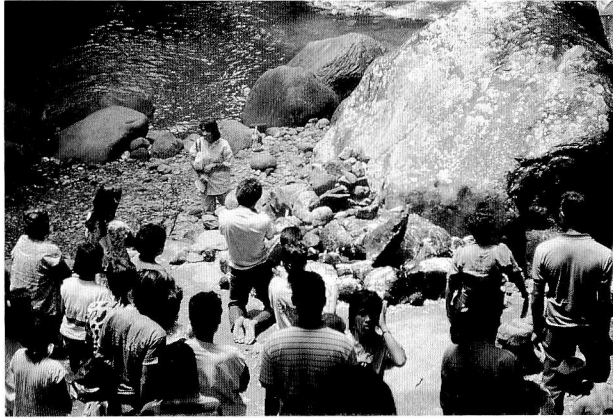
ミスティカの教会内部。中央に主祭壇があり、それに対して女は左、男は右に座って祈る（1989年3月、寺田撮影、以下同じ）。

[写真2]



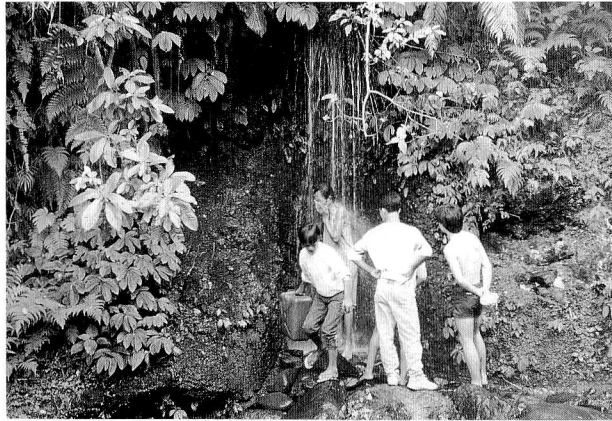
ミスティカの教会の旗。フィリピン国旗と同じ色が用いられ、中央にはマリア＝ベルナルダ＝バリタンの姿が描かれている。

[写真 3]



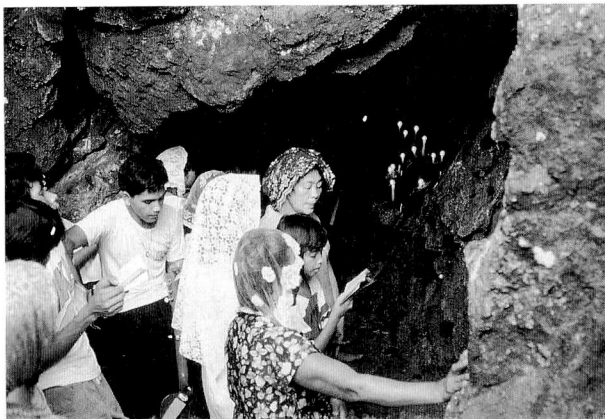
サンタールシア地区内のラグナス川下流域にある  
プウェスト。Piedra Mental と呼ばれ、岩の前にロー  
ソクを立てて祈る。

[写真 4]



同じくラグナス川下流域にあるプウェスト。Buhok  
ng Birhen と呼ばれ、ここで巡礼者は沐浴する。

[写真 5]



Ina ng Awa と呼ばれる洞窟。その入口で祈りを捧げている光景。

[写真 6]



Santos Kalbaryo と呼ばれる丘の上のブウェスト。キリストが処刑された場所とされる。

[写真7]



キナブハヤン側にある Santos Kolehiyo というプウェスト。聖週間中に岩の前にテントを張って野営する巡礼者達。彼らはミスティカの信者ではなく、マニラ首都圏から訪れたカトリック信者である。

[写真8]



キナブハヤン側のプウェストの中核をなす場所で、復活したキリストの足跡が川底の岩の上に残されていると信じられている。岩はネットで覆われており、その前にローソクを立てて祈る。